

06 セルビアにおける日本研究

——ベオグラード大学日本学事始め——

山崎佳代子

はじめに

2016年は、セルビアの日本学にとって大切な年である。ベオグラード大学文学部に選択科目としての日本語コースが導入されたのが1976年、今秋は40周年を迎える。また本年は、デヤン・ラジッチ博士30回忌にあたる。セルビアのみならずユーゴスラビアにおける日本学の先駆者であり、ベオグラード大学文学部日本学専攻課程開設のために、文字通り命をかけた人である。

今日、ベオグラード大学文学部の日本学専攻課程は、リリヤナ・マルコヴィッチ（旧姓ジュエロヴィッチ）教授をはじめ、筆者ほか十余名の教官がセルビアの日本学研究、日本語教育に携わっており、1年生から大学院生まで300名ほどの若者が集う課程に成長し、セルビアにおける重要な日本文化の発信者としての役割を担っている。

セルビアにおける日本学の節目となるこの年に、国際日本文化研究センターに滞在させていただくことになった。私自身は、37年ぶりで半年という長い時間を日本で過ごし、セルビアという国を遠く離れて見つめる時間を手にした。日本を出てから初めて二つの季節の移ろいを味わう。市中の山居というべき日文研で、ラジッチ先生の仕事を振り返り、今日のベオグラード大学における日本文学研究について記してみたい。

1. 日本学の先駆者、デヤン・ラジッチの生涯

デヤン・ラジッチは、1935年に、セルビア（当時は、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国）の北部カニジャ市に生まれた。ハンガリーとの国境が近く、セルビア語とハンガリー語がまざりあって聞こえる町である。両親はモンテネグロ人であった。モンテネグロの地から、家族は移動したことになる。モンテネグロはアドリア海を挟んでイタリアの対岸、旧ユーゴスラビアの南に位置し、叙事詩の伝統の豊かな土地である。氏の稀有なる語学力や記憶力は、モンテネグロ人の気質に支えられていたであろう。また少年期を過ごしたカニジャという多民族地域のもつ文化の複合性も、異国の文化に開かれた氏の精神を養ったのかもしれない。日本文学との出会いは高校生のとき、英語で読んだ俳句であったと、氏は後に回想

している。

ラジッチ氏は、ベオグラード大学文学部世界文学科に入学、世界文学専攻課程では、ヴォイスラヴ・ジュリッチ（1912-2006）教授の「世界文学」を受講した。ジュリッチ教授は、世界文学科（一般文芸・文学理論）の開設者であり、高名な文学研究家である。教授は、英・独・仏語などの文献を駆使し、日本文学についても世界文学の授業で語っていた。俳句に魅せられた青年は、日本文学を勉強しようと決意する。

卒業を待たずにイギリスに渡る。1955年、ロンドンで英文学を学び、そこから船でオーストラリアに出発する。英語はロンドンで初めて学んだが、すぐに上達した。旅しながら、同じ船でオーストラリアに向かう。ユーゴスラビアの移民たちに英語を教えたと聞いた。1958年からシドニー大学で日本文学と中国文学を学び、卒業後、東洋文学の研究に携わる。その後、日本政府奨学生として1964年から66年まで早稲田大学に留学し、日本の演劇を研究した。三島由紀夫の現代能にも関心を抱き、ひろく日本文学に触れた。

国費留学生が少ない時代である。同期に日本へ留学した学者には、優れた日本文学者であり翻訳家のエドワルド・クロッペンシュタイン教授もいた。二人は面識はなかったが、当時、留学生の青年と交流を進める日本婦人のグループが東京にあり、柔和な人柄のラジッチ氏は会員から尊敬されており、その名をよく聞いていたと、クロッペンシュタイン教授は昨秋、筆者に語っている。日本での留学を終えたラジッチ氏は、1967年にキャンベラ大学で修士号を取得し、研究生活を続けた。

1971年、オーストラリアでの研究生活に終止符を打ち、妻と三人の息子とともに、祖国ユーゴスラビアに帰国したラジッチ氏は、ベオグラードのコララツ人民大学で市民のための日本語講座と中国語講座を開設、教壇に立った。いずれも初級レベルであるが、ユーゴスラビア初の講座である。受講生のなかには、故山岸リリヤナ女史（1958-1998）がいた。彼女は中国に留学、上海で日本人と結婚し、大阪外語大学でセルビア・クロアチア語のコースを10年にわたって担当した。山岸女史は日本語も中国語も堪能で、今日でも珍しいセルビア・クロアチア語の講座を通してユーゴスラビア文化を伝える仕事をした女性である。ラジッチ家と親交が深かった。生き方や志に通い合うものがあつたのだろう。

ラジッチ氏は、ガレニカ製菓で翻訳の仕事をする一方、機会あるごとに会議通訳などでも活躍した。日本語の通訳や翻訳家が非常に少ない時代で、文字通り、国と国、言葉と言葉の架け橋であった。ユーゴスラビア社会主義連邦共和国は、

冷戦構造のなかで東にも西にも開かれた国であり、経済活動も活発で、日本との国家間交流もさかんであった。

だが氏が志していたのは、文学作品の翻訳であり語学教育である。ベオグラード大学に東洋学を興すために準備を始め、その努力が実り、1974年、ベオグラード大学に中国語が、1976年には日本語の初級の語学コースが導入され、ラジッチは初代の講師として初級を教えることとなった。いずれも選択科目で3年間の初級コースであった。日本語コースには、前述のリリヤナ・マルコヴィッチが加わった。

＊

ラジッチ一家は、ベオグラード大学文学部から歩いて5分ほどのヴァシナ通り14番地に住んでいた。戦前からの気品ある建物の二階にあった。日本からの留学生や文学関係者が、ときおり立ち寄り、俊子夫人の手料理を楽しみ、話に花を咲かせた。なかでもセルビア・クロアチア語の優れた翻訳者、田中一生と山崎洋は、ラジッチ氏と文学について話し合う機会が少なくなかった。ラジッチ氏は、あなたたちがいらっしゃると和食が楽しめますよと微笑み、二人の来訪を愉しんでおられたという。

翻訳家田中一生氏の存在も、当地の日本学にとって重要な意味を持っていた。田中氏は、早稲田大学露文科を卒業後、ベオグラード大学に留学し、世界的に名高いビザンティン美術研究家ゴイコ・スボティッチ教授のもとで美術史を学んだ人である。筆者も含め、ユーゴスラビアへ留学する者は、出発前には田中氏から貴重な助言をいただいていた。ノーベル賞作家イヴォ・アンドリッチの文学作品の翻訳などを数多く手掛ける一方、ベオグラード大学における日本学の発展を温かい目で見守り続けた。後に日本学研究者となるダニエラ・ヴァシッチをはじめ、日本を訪れたセルビアの若者たちも田中氏の案内で東京の文学散策を楽しみ、お土産に日本の書物をいただいたりした。

田中氏とラジッチ氏は、文学の翻訳に携わる者として友情に結ばれていた。当時のユーゴスラビアは出版活動が盛んだったが、1970年代に、ザグレブ市の出版社リベル（Liber）が日本文学選集を企画したときには、数学者で俳句の紹介者としても知られていたヴラディミル・デヴィデ氏とともに、ラジッチ氏も翻訳者として企画に加わっていた。ベオグラードでは、ナードナ・クニーガ社（Narodna knjiga）も積極的に日本文学の出版を企画していた。田中氏は作品の選択にいくつか提案をするなど、編集者の相談に乗った。島崎藤村の『破戒』の翻

訳を勧めたのは田中一生氏である。日本の南バルカン学研究者とユーゴスラビアにおける日本学研究者の協力は、今とは比べものにならないほど大切であった。またザグレブ（クロアチア共和国首都）在住のデヴィデ氏は、日本の文化をこよなく愛した人で、ラジッチ氏のよき友人であり協力関係があった。

翻訳家としてのラジッチ氏を語るとき、セルビアの文学者との交遊も記録しておかねばならない。戦後のユーゴスラビア文学、20世紀のセルビア詩を代表する詩人ヴァスコ・ポーパとの交遊である。田中一生と山崎洋がポーパに出会ったのも、ラジッチ氏の居間で、4人は和やかな時をともにした。ポーパには、漢字をグラフィカルに添えた詩作品があるが、ラジッチ氏との交遊に靈感を得たのだと思われる。この他、ポーパには連作「小さな箱」(Mala kutija)がある。「死んでいく父親は、幼い息子に大きくなったら開くようにと箱を残した。成人した息子が箱を開くと、そこに父の顔があった。箱には鏡が入っていたのだ」という中国の逸話をもとにしている、と詩人自身が註を施している。東洋のモチーフは氏との交流から得たのではないだろうか。ポーパはラジッチ氏の翻訳活動のよき理解者であった。詩人と分かち合った時間は、氏の翻訳活動を豊かなものとしたであろう。

＊

氏が翻訳した日本の文学作品は、多岐にわたる。最初の仕事は、『日本民話集』(*Japanske narodne bajke*, Narodna knjiga, 1979)であった。ロシア語からの翻訳者リリヤナ・シヤコヴィッチとの共訳である。氏の翻訳した部分が日本語からの初のセルビア語への翻訳となった。この後、目覚ましい翻訳活動を展開する。

1970年代後半の欧米における日本文学は、川端と三島を中心に紹介されているが、ラジッチ氏も、三島由紀夫と川端康成を高く評価していた。三島の『金閣寺』(*Zlatni pavilion*, Nolit, 1982; 1989)、川端の『千羽鶴』(*Hiljadu židralova*, Dečije novine, 1983; 1989)の翻訳を発表している。早稲田留学時代に三島由紀夫と会い、作家の署名のある皮表紙の書物を宝物のようにしていたと敏子夫人は筆者に語っている。阿部公房の『砂の女』(*Žena u pesku*, Narodna knjiga, 1982)、井伏鱒二の『黒い雨』(*Crna kiša nad Hirošimom*, Narodna knjiga, 1982)の翻訳もラジッチ氏の手による。タイトルは、編集者の意向で「広島黒い雨」となっている。ユーゴスラビアでは、広島・長崎への原爆投下については、教科書などにも詳細に記され、悲劇に胸を痛める人は非常に多かった。近世文学からは、井原西鶴の『日本永代蔵』(*Vječna riznica japanske porodice*, Liber, 1985)を翻訳している。死後、刊行さ

れたものには、志賀直哉の『暗夜行路』（*Dug put kroz mračnu noć*, Liber, 1989）、松尾芭蕉の『奥の細道』（*Uska staza u Zabrđe*, Draganjić, 1994）がある。

ラジッチ氏は、黒柳徹子の『窓ぎわのトットちゃん』（*Mala Toto na prozoru*, Dečije novine, 1985）も訳している。いわさきちひろの美しい水彩画を表紙にあしらった書物である。「今まで難しいものが多かったから、こうした軽いものの翻訳も楽しいですね」と穏やかにおっしゃった。児童書が日本語から訳されることは今日もほとんどないので、広い読者を獲得している一冊である。いずれの翻訳書も大手出版社から刊行されたものである。

日本現代文学のアンソロジーには、『陰影の技』（*Veštine senčenja*, Narodna knjiga, 1983）がある。三島由起夫、谷崎潤一、川端康成、遠藤周作、永井荷風などの短編を収めた。タイトルからも感じられるように、谷崎を連想させる神秘的な日本をイメージした編集。翻訳には、編者であるラジッチ氏のほか、当時は若手であった日本語からの翻訳家ドラガン・ミレンコヴィッチ氏、英語からは優れた翻訳家であり現在は作家として有名なダヴィド・アルバッハリ氏も加わっており、共同作業であった。

単行本として刊行されることはなかったが、文芸雑誌には、高村光太郎、宮沢賢治、谷川俊太郎らの詩作品、芭蕉の俳諧をはじめ、数多くの翻訳を発表したほか、川端康成の掌小説など短編の訳も発表しており、翻訳者としてのラジッチ氏の守備範囲の広さ、美意識がうかがわれる。掲載された文芸誌は、レストピス・マティツェ・スルプスケ（*Letopis Matice srpske*）など、長い伝統を誇る文芸誌である。編集者は、詩人や作家であったから、彼らとの交流も日本文学紹介にとって重要であった。

今日、ラジッチ氏の翻訳書はすべて、詩人シモン・シモノヴィッチが興したTANESI社が、遺族の厚意によって版權を譲り受けて再刊している。ベオグラード大学の日本学専攻課程では、ここに挙げた翻訳書を必読書に指定しており、日本文学を学ぶ学生たちに、氏の翻訳した書物は読み継がれ、文学作品について語り合うことができる。文学愛好家たちにも読まれており、『金閣寺』や『砂の女』は新しい世代の読み手たちにも愛されている。氏が翻訳した作品が、現代の読者の心にも響くことを示すと同時に、時代を超えて価値のある作品が選択されていたことを物語っている。

筆者も再刊にあたって『暗夜行路』に解説を書く機会があり、氏の翻訳と向かい合う時を森の宿で過ごした。2016年、ベオグラード大学に提出された修士論文には、イエレナ・オブラドヴィッチ氏が提出した「『暗夜行路』における移動

の意味」がある。移動をすることによって、主人公が思想を変化させ深めていくことを指摘したものである。『暗夜行路』は、明快な文章や精密なプロットが魅力的な小説で、さらに読まれるべき作品である。よい翻訳書が生まれる意味を、改めて感じさせられた。翻訳者とは、翻訳によって生き続けるのである。

日本文学の翻訳者としてのラジッチ氏は信頼され、高い評価を受けていた。セルビア翻訳者協会の主要メンバーであり、ミロシュ・ジューリッチ翻訳賞の審査委員であったダーナ・ミロシェヴィッチ氏が語ってくれたエピソードがある。

『窓ぎわのトットちゃん』の翻訳が刊行されると、ダーナ氏をはじめ数名が、「翻訳賞は、日本語から直接、翻訳したラジッチ氏に授与すべきだ。これまでの業績に対して、わが会は何一つその労をねぎらっていない」と主張した。しかし、児童文学では作品そのものが弱い、という意見に押され、ラジッチ氏の受賞は実現しなかった。落胆したダーナ氏は、会議のあとで仲間と翻訳者協会の近くの菓子店に入る。今は、こうした店は少なくなったが、庶民のささやかな憩いの場所で、レモネードを飲みながら伝統的な菓子を食べる簡素な店である。だが、あいにくの満席。すると、子ども連れの背の高い紳士が、にこやかに立ち上がり、「どうぞ、ここが空きますから」と席を譲ってくれた。「それがラジッチさんだったのよ」と彼女は懐かしそうに言った。奇遇であるが、彼女は早逝した山岸リリヤナさんの叔母にあたる。ダーナ氏は、優れたフランス文学の翻訳家。ラジッチ氏の謙虚で穏やかな性格を彷彿とさせる話である。

ラジッチ氏は翻訳活動と並行して、日本語を選択科目から4年制の専攻課程に発展させるべく努力を続けていた。大学の規定では、専攻課程を発足させるためには、関係する研究領域で博士号を取得した者が最低1名必要となる。論文執筆許可の手続き、委員会の構成、資料の収集と、解決すべき問題が山積していた。苦労の末、ラジッチ氏は、博士論文の執筆にとりかかる。指導教官は、ヨーロッパ自然主義について研究書のあるラドスラヴ・ヨクシモヴィッチ教授である。未知の日本文学に対する健康な好奇心の持ち主だった。東洋文学にも関心を持ち、快活な研究家である。私も修士課程で授業を聴講したが、セミナー論文では近松門左衛門の心中のモチーフについて書かせていただいた。学部では自分の専門分野以外の論文指導を引き受ける教授は極めて稀で、ヨクシモヴィッチ教授の勇気がなかったら、日本学の専攻課程の開設は遅れていただろう。

ラジッチ氏は執筆に集中、ベオグラード大学文学部世界文学科に博士論文「日本近代文学における自然主義」(Naturalizam u modernoj japanskoj književnosti, 462 str, Beograd, 1981)を提出する。ベオグラード大学文学部における最初の文

学博士誕生。博士論文は、ユーゴスラビアにおける初の日本文学に関する研究書となった。日本における自然主義文学の研究を体系的にまとめたほか、ヨーロッパ自然主義との比較考察を行うことは、いまもなお意義の深い仕事である。論文の審査には、ワルシャワ大学からポーランドの日本文学研究を代表するミコライ・メラノヴィッチ博士も加わった。審査の日には、ご家族のほか、選択科目として日本語を受講していた学生たちも数多く参加して先生を祝福し、会場は明るく和やかな雰囲気に包まれた。残念ながら、現在は、大学図書館に収められた論文が閲覧できるだけである。2006年には、氏の没後20周年記念論集が編纂され、1章を掲載したが、単書としての刊行が望まれる。

博士号取得後、ラジッチ氏は、日本学専攻課程、中国学専攻課程を開設すべく、学科長、学部長をはじめ多くの関係者に構想を説明して協力を求めた。当時の学部長はトルコ語の研究者スラヴコ・ジンジッチ教授、学科長はアラブ語の研究者ダルコ・タナスコヴッチ教授で、両氏ともラジッチ氏の構想を支持し、開設に積極的であった。

これに平行して、氏はカリキュラムの制作に着手する。日本語教育、日本文学、日本事情（文明論など）からなる専攻課程をデザインするのは、簡単な作業ではなかった。日本学専攻課程のカリキュラムについては、1983年から1年間、国際交流基金の招聘による日本滞在で、収集した資料や書物をもとに作成された。その頃の日本学の水準から見て、ラジッチ氏の手によるカリキュラムは均整の取れたものであった。

当時のベオグラード大学文学部では、外国の文化に関する学科は、外国語教育、文学研究、文化研究と基本3領域から成り立っていた。外国語の専攻課程のカリキュラムは、語学、文学、事情論の三つを柱としていた。日本語専攻課程のモデルになったのは、すでに導入されていた東洋学科のアラブ語、トルコ語である。日本語教育は、講義のほか、演習が行われていた。その他の専門科目は講義形式で、演習はない。第二外国語以外は、ほとんど選択科目はなく、多くが必修科目であった。日本語は1年次から4年次まで演習と講義があるほか、3年次と4年次に翻訳演習がある。日本文学史は3年次と4年次。日本事情に関係する科目には、1年次の日本学入門、3年次と4年次に日本文明論と日本社会文化史が用意された。これらの科目のカリキュラムもラジッチ氏の手によるものであった。

日本文学の参考文献には、ロシアの比較文学者であり日本学研究の第一人者であったニコライ・コンラッド、アメリカのドナルド・キーンなどの研究書が挙げられており、比較文学的な視点が感じられる。文学部に提出されたカリキュラム

は美しくタイプされていた。氏は、「西洋文学と比較して、その共通部分や異質性などを研究しつつ、現時点に於いて日本文学が世界文学のなかでどのような位置にあるかを特に重視するような「日本文学史」にしようと考えています」と、日本の雑誌『翻訳の世界』（1985年3月号、74-75頁）のインタビューで述べている。

日本学専攻課程開設の準備が始まった1980年代は、多民族国家ユーゴスラビアが存在していた時代である。1981年、国家の象徴でもあったティトーが死去すると、様々な政治問題、経済問題が少しずつ浮上してきてはいたが、冬季オリンピックがサラエボで開催されるなど、国力は小さくはなかった。よき時代に、日本学専攻課程の準備は進められたことになる。ラジッチ氏は日本学専攻課程の構想が固まると、日本語を教えてはどうかと私に声をかけてくださったのだった。

＊

その当時の私といえば、1979年、北海道大学で露文科を卒業後、スラヴ文学を学ぼうとユーゴスラビア給費留学生としてサラエボに1年留学、その後、スロベニアのリュブリャナ民族音楽研究所を経て、ベオグラード大学文学部修士課程に入ったばかりだった。サラエボ大学では、ノーベル賞作家イヴォ・アンドリッチ研究の第一人者ラドヴァン・ヴチコヴィッチ教授のもとでユーゴスラビア文学史を学び、セルビア・クロアチア語圏の口承文学の豊穡に魅せられ、南バルカンの民謡に現れる「心中」のモチーフについてリュブリャナでも調べ、そのあとベオグラードで、近松の人形浄瑠璃にみる心中ものとの比較研究を始めていたのである。

ヴチコヴィッチ教授は、ご自身には厳しい方だったが、日本から来た私にとっても親切にしてくださった。私だけのための水曜日ごとの体系的な文学史の講義のおかげで、多民族地域のユーゴスラビア文学の複雑な歴史の全貌を把握することができた。今では考えられぬ贅沢な話である。サラエボに着いて間もないころ、「我が国では日本のことはよく知られていませんが、詩人のツルニャンスキーが、日本の古歌のアンソロジーを編んでいます。ご存じですか」と、ヴチコヴィッチ教授がおっしゃったのを思い出す。

異国で母語である日本語を教えるとは、なんと魅力的な仕事だろうか。当地は女性が働くことは当然の社会である。保育所や有給休暇のシステムも含めて、当時の労働条件は日本とは比べものにならぬほど整備されており、安心して働くことができた。子育ての真ただ中、人生が大きく変わろうとしていた。大学側が法律を調べたところ、国家間の文化交流協定のない国の語学講師を任用すること

はできず、研究職を兼ねた助手のポストということで、永住権の申請なども含め、私も手続きのために書類を揃えることになった。

だが、すでに病魔がラジッチ氏の身体をむしばんでいた。夏に、ラジッチ家を訪ねると、胃に潰瘍が見つかったとおっしゃった。いつものように、居間のソファに深々と座り、動揺した素振りはまったく見せず、静かに受け止めておられる。闘病中に、委員会の報告書を書きあげ、他の委員たちの署名を集めてくださったのだ。秋に入院となった。

1985年、秋は深まっていく。法律上の様々な問題が解決し、文学部のすべての会議で承認され、私の就職が決まった。電報で採用通知が届くと、人事課で手続きを済ませ、花屋で白ユリの花を求めて、市立病院に向かった。長身で体重が90キロ以上はあったはずの先生がすっかり痩せていた。40キロもないのと、俊子夫人が囁く。無事に採用されたと先生に申し上げると、「それは、よかった。これで日本学はなくななくてすみます」と、心から嬉しそうに穏やかな微笑みをたたえておっしゃる。「早く良くなってください」という私の声は、病室のよどんだ空気に吸い込まれていった。病室から出たら、廊下は長く、庭は寒々として、樹木は枯れており、世界があらゆる色彩を失っていた。

1985年11月、日本学科は中国語科とともに発足する。だがラジッチ先生は、教室に戻ることもなく入院生活を続け、翌86年1月に永眠。享年50歳。あまりにも早すぎる旅立ちである。

日本学者としてこれからという時に昇天したラジッチ氏の足跡を辿ると、小さいが真珠のような文学の仕事が見つかる。それは『文学用語事典』(Dragiša Živković, *Rečnik književnih termina*, Nolit, Beograd, 1985, 896 pp.) の「俳句」(p. 243) の項目である。基本文献としては、米国の R. H. Blyth の4巻本 (1949-52)、A. Miyamori 著の *An Anthology of Haiku: Ancient and Modern* (1932) のほかに、セルビアで初めて日本の古歌のアンソロジーを編んだ詩人ミロシュ・ツルニャンスキーとその本の書評を著わした文学者イシドラ・セクリッチも記されている。

この文学事典に執筆をすることはラジッチ氏が研究者として評価されていたことの証でもあった。当時のユーゴスラビアでは、ベオグラード、ザグレブ、サラエボの3都市の大学の文学研究家の交流はさかで協力関係があった。バフチンやロットマン、シクロフスキーの研究は進んでおり、文学理論の研究が華やかな時代だった。文学研究家たちを総動員して編纂されたのがこの辞典であり、文学の潮流、ジャンルの定義などが整理され、いまもなお版を重ねている。ベオグラードの文学芸術研究所の刊行で、編集責任者は文学理論研究を代表するドラギン

ヤ・ジヴコヴィッチ教授だった。この事典を開くとき、「俳句」の項が、季節の色をとどめた押し花のように思われる。俳句に魅せられた青年が、早すぎる人生の終わりに俳句について書き残した。あたかも人生が一句であるかのように。「日本人は大きく広いところから深く凝縮した世界を志向しているように思えます」（『翻訳の世界』1985年3月号、74-75頁）と、ラジッチ氏は述べている。

あるときのこと、ラジッチ氏がお電話で、「日本の近代文学は、都市と農村について、どのように描いているでしょうか。それについて論文を書くので」と私にお尋ねになったのを思い出す。あのときは、ろくに満足な答えもできず残念でならない。様々な視点から、日本文学を語る時代が始まっていた。

セルビア国営放送のアーカイヴには、ラジッチ氏へのテレビ・インタビューが残されている。インタビュー担当はヴラディミル・リストヴ氏である。博士号の所得が話題を呼び、文化番組で日本文学について語っている。日本の平安時代の文学を取り上げ、物語のジャンルに注目し、紫式部と『源氏物語』について語った。

「日本の文学は、世界でも類まれに豊かな文学である。とりわけ平安時代の宮廷文学は、さまざまな芸術を生み出したが、なかでも物語というジャンルは興味深い。理想化された源氏を主人公とするこの作品は、心理描写に秀でている。とりわけ女性の登場人物たちの心理の描写は見事である。世界でこの時代に、このような完成度の高い作品はないので、世界初の小説ということもできるだろう。日本の古典文学の傑作である。20世紀のジェームス・ジョイス、ブルーストたちの心理小説と比べることができる。同じモチーフとテーマが波のように反復する作品の構造は交響楽ともいえ、それが魅力である……」

撮影は、文学者や翻訳家たちが立ち寄り語り合ったあの居間で、グレーのスーツの先生が落ち着いて話しておられる。まだ生きていらっしゃると錯覚するほど……。

50年という限られた時間を疾走するごとく、ラジッチ氏は日本文学の翻訳活動に取り組み、この世を去った。日本学とともに中国学の専攻課程を立ち上げるという大きな課題に取り組みながら、氏は最後の書物を書き上げている。『禅』（Zen, Dečijie novine, Gornji Milanovac, 1985, 341 pp.）である。目次を見ると、「禅と日本人のメンタリティー、禅の源流、禅仏教の歴史、悟りと公案、禅と怪談、禅の話、日本文学における禅、禅と生きる知恵、禅と愛と性、禅とユーモア、禅

と宗教、禅と心理学、禅と科学、禅と西洋、禅と日常」と章が並び、鈴木大拙などを中心に、禅が紹介されている。文学作品の翻訳と同様、心を集中させて一気に書き上げたのだろう。斬新な表紙は、当時、第一線で活躍していたブックデザイナーのランチッチ氏の手になるもの。白地に「心」の文字を黒々とあしらひ、書の美しさによって読み手を誘う。ユーゴスラビアの読者にむけた禅についての入門書であるが、序文からは禅に寄せる一人の人間としての氏の想いが伝わってくる。序文の日本人の清潔好き、日本人の本好きなど、ラジッチ氏が日本の人々にそそいだ温かな眼差しが感じられる。先生の葬儀のあと、ヴァシナ通りのお宅を訪ねると、ラジッチ氏の母上は、あの書物を書いていたから息子はあんなに穏やかでいられたのです、とおっしゃった。この一冊こそ、氏の涅槃だったのだろう。この書物をきっかけに日本学を学ぼうと決心したという学生が今もときに現れ、胸を打たれる。東京大学で博士課程を修めたイーリヤ・ムスリン氏もその一人である。若手の日本研究家で、セルビア語に太宰治の『斜陽』を訳している。

2. それからの日本文学と私たち

ベオグラード大学の日本学は、ラジッチ氏から次の世代にゆだねられて出発した。ラジッチ氏は、みずからが開設のために尽力した2つの専攻課程に入学した第一期生を教室で迎えることができなかったのだった。

今日のセルビアの大学教育は、EUのボローニャ協定に沿って2005年に大学改革を行い、単位制度が導入され、数多くの選択科目も生まれ、開設当時からは多くの点で様変わりしている。ベオグラード大学文学部の日本語・日本文学専攻課程も、言語・文学・文化という3領域から日本学を学ぶコースとして多数の選択科目が置かれ、そのうち数科目は日本学が主専攻ではない学生にも開かれている。

専門課程としての日本学発足から今日まで、私は仲間とともに日本語教育と日本文学の講座を担当してきた。30年という歳月を、セルビアの日本学とともに生きてしまった。限られた紙面であるが、ラジッチ先生亡き以後のベオグラード大学の日本学の歩みを日本文学の講座を中心に記しておきたい。

＊

第1期生は10名。現在、本学部で教授をつとめるダニエラ・ヴァシッチ氏も在籍していた。リリヤナ・マルコヴィッチと筆者のほか、国際交流基金から派遣講師1名加わって3人だけの出発である。助手だった私と小松知子講師（1985-87在任）、後には荒川みどり講師（1988-1990在任）が演習を担当し、日本語教育が

産声をあげた。伝統のないところで発足した日本学専攻課程にとって、交流基金の講師派遣は計り知れぬほど有意義なものだった。日本語教育を専門とする講師は、日本語コースを充実させただけでなく、学生と自由に話しあえる友として貴重な存在だった。また国際交流基金から届けられる教材や教科書なくしては日本語教育の開始は不可能だった。

日本文学の講座は、1期生が3年生に進級した1988年に開始される。当時は、本学部に専門家がなかったため数多くの苦労があり、国外から研究家を招き集中講義を行った。最初の集中講義を担当したのは、当時ソフィア大学（ブルガリア）の十文字華子氏ことツヴェタナ・クリステヴァ氏である。1週間の集中講義が2回行われた。少数のクラスであり、密度の濃い授業となつて和やかだった。学生は、英文の参考資料を用いてセミナー論文を提出し、試験は口頭試験で行われた。古典を中心とする日本文学史の輪郭が学生たちに伝わった講義だった。クリステヴァ氏の話術に魅了され、古典の魅力を知った者も少なくない。セミナー論文は、歌舞伎や文楽、能楽などをテーマとしたものもあり、内容は多様であった。クリステヴァ教授は、現在、国際基督教大学（ICU）で活躍しておられる。

次に集中講義が行われたのは1989年10月から3か月間、協定校である中央大学の長崎健教授によるものだった。質素な外国人講師宿舍での生活など、ご苦労も多かったはずだが、この集中講義によって日本文学研究の土台が築かれたのである。講義は日本語で行われ、当時、助手であった私が通訳を務めた。この通訳体験は、未熟な私にとって厳しい修行であった。教授には講義の内容をあらかじめ届けていただき、キーワードを押さえておく。手書きの原稿と配布資料をいただき、準備をして授業に臨む。通訳が入るので、実際に教授が話す部分は1講について45分であったろう。しかし内容の濃いものだった。明確な解説のあと、実際の文学作品の引用をする形で進められ、ユーモアのある楽しい授業であった。だが、私は『古事記』の冒頭部分などを通訳するわけである。勉強に勉強を重ねた3か月であった。学生には講義録を提出してもらい、誤解が生じてはいないか、通訳で用いた訳語が適切だったかなどを確認する。学生たちは講義録をコピーして共有し、教授の帰国後、これに基づいて私たちが口頭試験を行った。

集中講義の通訳の準備の苦労は、今となれば、よき思い出である。美学や哲学、歌論などに関する用語はとりわけ難しかったが、この経験によってキーワードの定訳ができた。動植物の名前も難しかった。『源氏物語』に登場する植物の名前では、藤の花が思い出される。訳語を見つけたあと、実際に花の咲いている場所をベオグラードで発見、そのあと源氏を講義するときは必ず、どこに咲いている

かを学生に伝えた。今では、インターネットの普及でこうした作業は楽になっているが、淡い紫の藤の花をコサンチッチ横丁の煉瓦塀の家で見つけたときは嬉しかった。今も5月になると花をつける。アドリア海沿岸の町では見かけるが、内陸のベオグラードでは珍しいのだ。

長崎教授の授業は、第1講で日本文学の地域的な特徴を論じたあと、2講は時代区分の解説、3講は美意識の変遷を解説、そのあとは時代を追って文学作品、ジャンルを解説していくという流れであった。多少の変化を加えながら、このスタイルを概ね踏襲してきた。はじめて日本文学に出会う若い人々たちに、最初の段階で文学史の全体像を把握してもらうことは重要であるし、講座全体の流れを魅力的なものにする。

講義の通訳を通して、海外で日本文学を教える際に、何が重要であるかを考えさせられた。美意識に関する用語（あはれ、をかし、わび、さび、幽玄、余情美など）や、歌論などに関わる用語（枕詞、縁語など）は、英語など他の言語を介して説明すると、基本概念から遠ざかっていく。文学や美学の基本概念を伝えることは、きわめて繊細な作業であると実感せざるをえなかった。学生の共通の母語がある場合は、母語の文学史の諸現象や母語による文学理論をふまえ、概念を精確に伝える訳語を選ぶ必要がある。近年は、外国人留学生に対する英語のコースの必要が強調されているが、世界は英語圏だけではない。小さな言語であっても、海外の大学において受講者の母語が共通の場合は、丁寧に日本文学に関する訳語を決めていくことが大切である。文学の言語とは、なんと感じやすい言語であろうか。文学の言葉が、翻訳や通訳などを介して別の言語に移動していくと、意味やイメージが大きく変化してしまうことがあるのだから。

集中講義が終わると長崎教授は、近世、近代、現代も同じようなスタイルで教えたらよいと提案してくださった。こうして1990年から、3年生と4年生を対象に私が日本文学史を講義することになった。『古事記』や『万葉集』から紐解き、中世、近世、近代を経て、横光利一など前衛文学まで、日本文学の変遷を異郷で辿ってきたことになる。セルビアの季節の変化を、日本文学の流れと重ねてきたのである。

講座を運営していくために必要な書物については、国際交流基金の書籍寄贈のプログラムに申請することになり、長崎教授が選書をしてくださった。寄贈された書籍なくしては、日本文学史の講座を続けることは不可能であっただろう。寄贈された書物のなかで特に貴重だったものには小学館「古典文学全集」がある。当時刊行されて間もないもので、現代語訳が付されている。あわせて明治書院刊

「研究資料古典文学」と「研究資料現代日本文学」の叢書が、その後の当地の日本文学の講座にとって基本的な文献となった。その後も長崎教授は、当時、院生であった菊地明範氏とともに研究に必要な資料を送ってくださったほか、和歌などについて手紙で貴重な助言をくださった。筆者のアヴァンギャルド詩研究についても、研究家の古俣裕介氏を紹介してくださり、異国での閉ざされた研究活動を支えてくださった。

文学関係の図書は、多くの人々の厚意で充実していった。ラジッチ家からは、先生の蔵書が寄贈された。日本語の文献ばかりではなく、英文の優れた研究書が数多くあり、多くの学生に読み継がれていった。また筑摩書房の「現代文学大系」全巻は、本学の日本研究になくはならぬ書物となった。翻訳家の田中一生氏は、ご自身もいくつか項目を執筆した平凡社刊『世界大百科事典』を日本ユーゴスラビア友好協会の仲間と寄贈してくださったほか、岩波書店刊『日本古典文学大系』、安倍公房や夏目漱石の全集など、膨大な図書を個人で寄贈してくださった。この他、国際交流基金、共立女子大学、日本書籍出版協会をはじめ、シルクロード雑学大学などから書籍をいただいた。

だが1991年の春、ベオグラード大学日本学専攻課程は、暗い時代に遭遇する。多民族国家ユーゴスラビアにおける内戦没発、さらに国家解体のプロセスが始まったのである。徴兵制度があったので、配属先の兵舎で紛争に巻き込まれ、想像を絶するような体験をした後、大学に復帰できぬまま退学したV君のことを思い出す。一度だけ教室に顔を出して、新聞などでは報じられぬ惨事を知らせてくれた。美しい戦争などはない。

1993年、ユーゴスラビア（セルビアとモンテネグロ）に国連制裁が課せられると、国はさらに緊張した。多民族国家の解体の責任は、独立ではなく連邦を存続させようとした共和国だけに問われた。制裁は経済、交通、文化・学術・スポーツも含む過酷なものだった。医療器具や薬品の輸入もままならぬ時代、知人の妻はインシュリンが手に入らず亡くなった。学術雑誌は海外から届かなくなり、国家間の留学制度は麻痺した。すでに文科省の留学が内定していた学生には、ただちに取り消しの知らせが届いた。オリンピックも、団体競技は出場停止、個人競技では、国のマークを一切つけず、白いシャツでの参加だけが認められた。当時、助手だったダニエラ・ヴァシッチ氏も、国際交流基金による1年間の研修が取り消された。

＊

内戦の時代は、混乱の時代だった。クロアチア出身の学生たちにも、民族紛争の嵐は辛かった。愚かなメディア戦争から、私たちは教室のよき人間関係だけは守ろうと心を尽くした。国内も政治の風が吹き荒れ、大学は政治活動をする学生たちの手で封鎖され、ストライキが続いた。定期試験を予定した日に、反政府デモが始まり、苦勞して実施した試験をやり直せという要求が学生団体から出された。激戦地となった村の両親のもとへ帰る女学生に、夏の宿題だった日本語の日記を添削し、及第点をつけて送り出す。それきり、彼女は教室に戻らなかった。オリヴェラという名前だったと思う。

ユーゴスラビアという多民族国家が内戦によって解体し、これまで連邦を構成していた共和国は分離独立して、私たちの生活圏はセルビアとなっていく。学生たちのなかには、難民として来た者も少なくなかった。これまで築かれていた価値観が、砂の城のように崩れていく。閉鎖状態のなかで、ベオグラード大学における日本学が、近隣諸国から大きく遅れをとることは火を見るよりも明らかだった。国際交流基金からの講師派遣も途絶えた。だが戦争という異常事態のなかで、諦めている暇などはなかった。耳の奥から、ラジッチ先生の声が何度も聞こえてきた。「日本学がなくならないですみます……」と。日本語教育をいかにして続けていくか、日本文学の講座をいかに進めるか。文学の授業では、中世の無常観が心に染みた。風姿花伝、徒然草、平家物語、方丈記……。

＊

私たちに課せられた仕事は簡単ではなかったが、内戦時に素晴らしい出会いに恵まれたのは奇跡としかいいようがない。政府の奨学金が途絶え、閉塞感につつまれた時代だからこそ若い人を励まそうと、田中氏の呼びかけで、東京大学の柴宣弘教授、翻訳家の山崎洋の3氏はお金を出し合い、四年生の最優秀者に「桜賞」を授与する決心をした。国連制裁が解かれる年まで続けられ、現在、セルビアの外務省で活躍するスネジャナ・ヤンコヴィッチ氏、後に大阪大学で博士号を取得するドラガナ・シュピッツァ氏、そして今日、ベオグラード大学教授となったダリボル・クリチコヴィッチの3氏が受賞した。副賞は『講談社日本語大辞典』で、受賞者は、賞状とともに、ずっしりとした辞書を厳かに受け取った。俳句の朗読会など、文学プログラムとともにベオグラード市立図書館の初夏の庭で授賞式が行われたのも懐かしい思い出である。

内戦の時代の私の課題は、博士論文を書き上げることだった。修士論文「セルビア・クロアチア語圏の民謡における情死——日本文学と比較して」(Tragična

ljubav dvoje mladih u srpskohrvatskoj narodnoj poeziji i japanskoj književnoj tradiciji, 1986) は、心中のモチーフを扱ったタイポロジー研究であったが、博士論文のテーマを選ぶまでに長い時間がかかった。留学も研究滞在も許されない。戦争が始まったころ、詩を書き始めていた私の心に、アヴァンギャルド詩が浮かんた。第一次大戦の死の灰からダダイズムが生まれた。セルビアも日本もヨーロッパ・アヴァンギャルドの受容者である。比較していくことで、鮮明になるものがあると考えたのだ。奇しくも、そこに立ち現れてきた書物は、1928年にツルニャンスキーが編んだ日本の古歌のアンソロジーである。前衛運動の中で、中国と日本は、セルビアの詩人たちに新しい風を吹きこんだ……。文学事典にラジッチ先生が記し、ヴチコヴィッチ教授が教えてくださったあの書物である。

アヴァンギャルド詩をテーマに選んだ私が、ノヴィツァ・ペトコヴィッチ教授に巡り合えたのは、暗い時代の一条の光であった。文学事典の編纂者であるジヴコヴィッチ教授の愛弟子であり、ロシア・フォルマリズムの研究家、セルビア20世紀文学の代表的な研究家である。数々の困難にもかかわらず、指導教官を快く引き受けてくださったのだった。アヴァンギャルドの基本理念は、この出会いがなかったら理解できなかっただろうし、セルビアの前衛運動の全体像も見えなかっただろう。国が閉鎖された時代にあって、外国文学の資料収集には限界がある。だが文学理論の研究の水準が高いセルビアで、文学テキスト分析には可能性が残されている。詩というテキストの読み解き方を教授に教えていただき、日本文学を読み解く眼が変わった。比較文学の方法、文学テキストの分析は、日本文学を外から観る方法として、閉鎖された時代にも新しい道を示してくれたのだった。ペトコヴィッチ教授は、ティトー元帥死後の政治危機で、サラエボ大学を追われた後、ベオグラード大学に移られていた。

振り返れば、封鎖された時代ではあったが、数多くの日本の研究家にお世話になった。アヴァンギャルド文学研究家の千葉宣一教授は、見ず知らずの私に貴重な書物を貸してくださり、手紙で励ましてくださった。日本に帰国の折には、友人の父である江頭彦三先生や剣持武彦先生のお宅で、近代詩についてお話を聞かせていただき、ご指導いただいた。詩人でフランス文学研究家の安藤元雄教授は、国連による文化制裁の最中に、セルビア文学者協会主催の作家会議に参加し、ベオグラード大学の日本学科の学生たちを訪ねてくださった。多くの出会いに支えられていたのである。

制裁下での日本語教育には厳しいものがあった。交流基金からの講師派遣が中止となり、語学演習の量も質も低下せざるをえなかった。当時、日本語演習を担

当していた母語話者は私だけで、日本文学史も担当せねばならず、全学年を受け持つことは不可能であった。山崎洋が非常勤として3年と4年を対象に翻訳演習を担当することになった。だが、1年生の演習に母語話者の教師が確保できない年もあり、口頭試験で学生たちの発音のひどさに啞然とし、慌てて促音や撥音の練習をしたこともあった。

内戦当時、ベオグラード大学文学部国際スラヴ学センターの所長をしていたチョーリッチ教授は、「両国政府給費による交換留学の制度が途絶えているのだから、日本からベオグラード大学に留学したい人も困っているはずだ。留学希望者を募り、日本語の非常勤講師を時給でお願いしてはどうか」と提案してくださった。東京大学教養部の柴宜弘教授の院生、岡山大学文学部の鐸木道剛教授の院生などが、この形をとって留学が可能となり、日本語の非常勤講師として演習を担当することになった。この形式をとって内戦という異常な時代をなんとか乗り越えることができた。野町素己氏、奥彩子氏、嶋田紗千氏、山崎信一氏らが、この形で演習を担当した。

内戦当初は、日本人学校の教師夫人たちにボランティアをお願いしたこともあったが、残念ながら国連制裁を機に日本人学校は閉鎖されて長くは続かなかった。だが一人一人の授業には、誠意がこもっていた。教員免許を取得しておられた方の授業はすばらしかった。日本から留学希望者がなく、母語話者が確保できなかった年に、国際赤十字勤務のスイス人の夫人に日本語教育を依頼したこともある。東京で中級までを習っていた女性だった。多くの方々に支えられた12年間であった。

内戦を背景とする混乱のなかでの出会いには、忘れることのできないものも数ある。難民支援活動をしていたヴィゴツキー発達心理学の実践家ヴェスナ・オグニェノヴィッチ女史との出会いである。彼女は、難民の人々の心理的支援を行っていた。学生のなかには、難民となった若者たちも多かった。彼女の活動に共鳴する。日本の現代詩を翻訳、「詩のワークショップ」を難民センターで展開して10年をともにしたのだが、この体験をもとに、詩のワークショップのフレームを日本語の教室に教授法として取り込み、大学の仲間とメソッド「詩歌（ことばうた）ワークショップ」へと発展させていったことは、この上なき収穫である。ベオグラード日本語教育のトレードマークとなった。

こうして閉ざされた時代にヒューマン・メソッドを言語教育の柱として、文字通り、夢中で仕事をした。人と人の出会いの中でこそ人間は発達するというヴェスナの思想と実践は、内戦の時代に生きる私たちの指針となった。ワークショップ

プで何度も群読することになる谷川俊太郎の連作「ポール・クレーの絵による「絵本」のために」や白石かずこの詩作品を、詩人スルバ・ミトロヴィッチ氏とともに翻訳したのが、私にとっては日本現代詩のセルビア語への翻訳の初仕事となった。

その後、日本からは現代詩人の安藤元雄、白石かずこ、谷川俊太郎、高橋睦郎たちがベオグラードを訪れ、ワークショップの輪に加わってくださった。池澤夏樹氏も2度、ベオグラード大学で講演なさっている。文学作品を語学教育に丁寧に織り込むことは、学生たちとともに教師たちを深く動機づけてくれた。時を豊かなものとした。歴史の狭間で、私たちを守り支えてくれたのは、ほかならぬ詩であり文学だった。あの時の体験が、私たちの日本語教育、文学教育の礎となっている。

＊

バルカン半島に起きた民族紛争は、世界規模のメディア戦争でもあり、人の思想や感情にも入り込む、醜く汚いものだった。だが内戦中に、助手の採用が許可され、文学・日本語教育にダリボル・クリチコヴィッチ氏とディヴナ・グルマツツ氏、日本文明にマリーナ・ジャオヴィッチ氏が教官として仲間に加わる。いずれも、今日の日本学の教授陣の核となる仲間たちである。

だが1999年春、NATOによるユーゴスラビア（セルビアとモンテネグロ）空爆が始まる。授業は中止、学生も職員もほとんど現れぬ校舎で、当直をするという緊張した日々が続いた。国の法律で、非常時における公務員の勤務については、6歳以下の子供を持つ女性には出勤の義務は免除されたが、私は「大きな子ども」の母親であった。朝の廊下は暗く、そこで出会う同僚と交わす言葉は、砂漠の水のように嬉しかった。家に帰り、自宅の本棚に並べた前衛詩関係の書物のタイトルを見つめながら、一瞬にして破壊され、無となっていく建物や人の情景が重なり、虚しさと闘わなくてはならなかった。第二次大戦中、日本でも無数の書物やノートが空襲に消えた。その炎が思いをよぎる。空襲警報解除のサイレンが朝空に響き渡ると自宅を出て、午後2時くらいに大学から自宅に向かう。ドナウ川を渡る電車の中では緊張する。橋はいくつも落とされていた。空襲警報が鳴り響くのは午後4時くらいだった。そこで空気は凍りつき、私たちは家にこもる。送電線は何度も攻撃を受けて停電、断水が何日も続いた。病院も停電、簡単な手術も困難になる。ワープロも立ち上がらない日が何度もあった。

78日間続いた空爆が終わり、最後の空襲警報解除のサイレンが鳴る。亡くなった人々、負傷した人々……。だが新しい時代が来た。

3. 実りの季節

苦労の末に、博士論文「1920年代における日本前衛詩の発展——セルビア文学との比較考察」(Razvoj japanske avangardne poezije 1920-ih godina u poređenju sa srpskom, Beograd: Filološki fakultet u Beogradu, 2002)を書き上げたのは2002年のこと。ラジッチ氏の後、長い空白を経てベオグラード大学に提出された2番目の日本学の博士論文となった。遅々たる歩み、完成までには気の遠くなる時間がかかった。精神の力が必要だった。いくたびも自分の力を疑った。だが異郷の言葉で言語表現を身につけるための試練だった。論文審査には、家族のほかに学生たちが来てくれた。友人たちもやってきた。ヴチコヴィッチ教授もいらっしやって、論文の完成を喜んでくださった。教授夫妻は内戦によってサラエボの町を追われて、難民生活をベオグラードの郊外で始められていた。論文が『日本アヴァンギャルド詩——セルビア文学と比較して』(*Japanska avangardna poezija: u poređenju sa srpskom poezijom*, Beograd, Filip Višnjić, 2004)と題して刊行されたのは内戦などの混乱が収まってからのことである。私の初めての研究書となった。

次の課題は、日本文学と日本語教育関係の科目のカリキュラムを書き直すことである。山のような新しい仕事があった。2005年から東京外国語大学から若手の日本語講師を2名迎えることとなり、日本語教育は目覚ましい発展を遂げることになる。この橋を架けることができたのは素晴らしいことだった。淵上真弓、水野(和田)沙江香、岡田さやか、宮野谷希、高橋亘各氏のあと、現在は、高見あずさ氏、正木みゆ氏が日本語講師として活躍し、日本語教育の新たなページが開かれた。

東京外国語大学の柏崎雅世教授、早津恵美子教授、留学生日本語教育センターの伊藤祐郎センター長、藤森弘子副センター長、藤村知子教授、花蘭悟教授各氏には、日本語教育についてご指導いただき、日本語講師の推薦もお願いしてきた。E-Learningの日本語教育システムJPLANGのセルビア語版を、チームで作らせていただき、学生たちはこのシステムを利用して日本語を学ぶことができるようになった。

日本語教育のために出版された書物には、山崎洋編の『セルビア語日本語、日本語セルビア語辞典』(*Japansko-srpski, srpskog-japanski rečnik*, Beograd: Zavod za udžbenike, 2003, 2008, 2014)がある。6000語あまりの規模で、中級までの読解と作文に利用できるほか小文法が付されている。セルビア語の文法学者ブレドラグ・ピッペル教授が文法用語について監修してくださったのは幸いであった。これま

で教室で用いられる文法用語には統一がなく、小文法の仕事は貴重であった。原稿の段階で私も意見を述べ参加することができ、後の授業や文法書の作成に役立った。

セルビア語による現代日本語の文法書が完成するのは、11年後のことである。JPLANGの文法解説に大きく手を加え、大学教育のために、私は『現代日本語文法 上・下』（*Gramatika savremenog japanskog jezika I i II*, Beograd, Zavod za udžbenik, 2014）を書きあげた。7年の歳月がかかったが、今日の日本語演習で活用されている。初めて教壇に立ってから、日本語の文法書を書かなくてはならないと考えていたが、悲願がかなった。授業の能率もあがり、学生たちの日本語学習も前に比べて楽になったと思う。見出しを日本語とセルビア語で併記、また例文も2か国語で示し、日本人講師も使えるように工夫した。この書物が完成して、ほっとしている。

文学の翻訳活動も、若手の研究家たちとともに続けられていった。若手の翻訳指導を行い、多くの翻訳書の監修を行った山崎洋の果たした役割は大きい。山崎洋が、ヴァシッチ、クリチコヴィッチ、グルマツとともに、4人で『古事記』を7年かけて訳したことは翻訳史に記録すべき出来事だった。4人は日本翻訳家協会の特別文化賞を受賞した。私はこの翻訳書のために解説を書き、『古事記』を何度も読み返した。大きな書物を外国語に訳すとは文字通りの共同作業である。

山崎洋は、このほかに芭蕉、蕪村、江戸俳句の翻訳集、奥の細道も訳し、日本文学の講座ではいずれも必読書となっている。ダニエラ・ヴァシッチは、アイヌの民話、芥川龍之介、森鷗外などを訳すなど、活発な翻訳活動を行い、山崎洋と「竹取物語」を共訳した。ダリボル・クリチコヴィッチは、芥川龍之介、池澤夏樹などの短編のほか、末木文美士の『日本宗教史』（岩波書店、2006年）を訳すなど多岐にわたる翻訳活動を行っている。ディヴナ・グルマツは村上春樹の『ダンス、ダンス、ダンス』（1988年）、『スプートニクの恋』（1999年）を訳して、村上ブームの口火を切った。

日本文学研究は、ダニエラ・ヴァシッチ教授とダリボル・クリチコヴィッチ教授が加わり、新たな展開をみせている。両氏の修士論文、博士論文の指導は、今は嬉しい思い出となったが、修論の冒頭部分の指導には膨大な時間を費やした。私が論文の指導を受けた恩師のペトコヴィッチ教授が脳溢血で倒れて、入院なさっていた。夕方遅くまで研究室で朱筆を入れて、そこから病院にお見舞いに行ったことを思い出す。書くということを伝える仕事は厳しいものである。教授はじきに逝去なさった。

ヴァシッチ、クリチコヴィッチ両氏とも優れた研究家、信頼される教師として成長した。博士論文を書き終えた私に、ペトコヴィッチ教授が「あなたは私の作品だ」とおっしゃったが、両氏は私の作品である、と尝试してみても二人とも怒ったりしないだろう。でもこの場合は、「青は藍よりいいで藍より青し」である。

ヴァシッチ氏は、セルビア口承文学と日本の古典文学との比較研究を中心に活躍している。修士論文「古事記における変化のモチーフ——セルビアの口承文学との比較考察」(Motiv metamorfoze u delu Kodiki – tipološka paralela u poređenju sa srpskom narodnom književnošću, 2006) は、『太陽と剣』(Sunce i mač – Japanski mitovi u delu Kodiki, Beograd, Rad, 2008) として刊行された。博士論文「日本古典文学におけるジャンルとしての物語——セルビア口承文学との比較考察」(Žanr monogatari u starojapanskoj književnosti, sa posebnim osvrtom na Taketori monogatari, u poređenju sa srpskom narodnom prozom, 2013) は、『竹取物語——日本文学における口承文学と記載文学』(Mesečeva princeza – Usmeno i pisano u japanskoj drevnoj književnosti, Beograd, Tanesi, 2013) として刊行され、ベオグラード大学の優れた研究書に与えられるヴェセリン・ルキッチ賞を受賞した。

クリチコヴィッチ氏は、修士論文「芥川龍之介の初期の作品におけるインターテクスチュアリティ」(Intertekstualnost u delima iz prve razvojne faze Rjunosukea Akutagave, 2006) で芥川短編小説における引用を研究した。新しい文学理論を駆使しての新鮮な仕事である。博士論文「夏目漱石と禅仏教」(Soseki Nacume i zen budizam, 2011) は、おびただしい数の文献を読みこなし、夏目漱石の生涯と作品を有機的に考察した労作である。田中氏寄贈の岩波の漱石全集を隅々まで読破した。漱石の生涯を描いた部分は、生き活きと書かれて小説のようだ、と文学批評家であり哲学者のサーシャ・ラドイチッチ氏は評した。詳細な年譜的研究とテキスト分析を総合した方法も、文学理論の専門家アドリアーナ・マルチェティッチが高く評価した。文学のテキストの外と内を統合した仕事である。『禅仏教と日本の近代文学』(Zen budizam i japanska moderna, Beograd, Albatros plus, 2014) として刊行され、多くの読者を得ている。文学のみならず東欧で数少ない仏教研究者として活躍が期待される。

わけでも前述の末本文美士著『日本宗教史』(Istorija japanske religije, Beograd, Albatros Plus, 2016) のセルビア語訳は労作である。クリチコヴィッチ氏は、セルビア語の読者のために薫り高い序文を寄せ、本文には詳細な註を数多く施し、素晴らしい書物となった。クリチコヴィッチの序文には、セルビアがギリシャ正教の文化圏に属することを考慮し、日本におけるロシア正教の布教についても詳し

く述べられている。末木教授の原書には正教については言及がないので、セルビアの読者には貴重な序文である。ラジッチ氏の『禪』から30年ぶり、日本の宗教に関する研究書がセルビア語で刊行されたことの意義は計り知れない。世俗の歴史をも視野に入れ、仏教、神道、さらにキリスト教の関係を精確に描写し、日本宗教の歴史の深層のダイナミズムを鮮やかに示す末木教授の本書は、日本学研究者だけではなくセルビアの多くの読者にとっても魅力的な書物となった。これから日本について学ぼうとするセルビア語圏の人々にとっての必読書となるであろう。

＊

2005年に行われたボローニャ協定による改革のあと、単位制度の導入に伴って、膨大な書類を書く仕事が増え、事務に関する教師の負担は計り知れない。しかしカリキュラムを刷新することで日本文学講座にも新しい風を吹き込むことになった。3年前からヴァシッチ氏は古典文学の講座を、クリチコヴィッチ氏は中世文学の一部と近代文学の講座を受けつぎ、それぞれの個性ある講義が行われるようになった。それまで私が一人で通史を講義していたが、新しい力が日本文学の魅力を瑞々しく伝えている。

私は、美意識の変遷と時代の概観、韻文、近世文学を担当し、現代日本語文法を著した後、久しぶりに日本語教育に加わり、読解のストラテジーを担当している。天気がよい春の日は、ときに学生公園で……。

日本学専攻課程の歴史は、バルカン半島に吹き荒れる戦争のなかで、数々の試練に出会いながらも、よき人々との出会いに恵まれてきた。ラジッチ氏が始められた日本学をこうして仲間たちと育んできたことは、なんという至福であろうか。内戦、国家解体、空襲……。様々な混乱のなかで、遅々とした足取りではあったが、ラジッチ氏が私たちに残した日本学の芽は、青々とした木の葉をつけた若木に成長した。

2014年3月、国際日本文化研究センターから小松和彦所長、末木文美士教授、細川周平教授をお迎えし、東欧諸国からも新鋭の研究家たちを招き、研究会を開くことができた。2015年10月には、東欧諸国の研究家とともに、本大学に集い、池澤夏樹氏をゲストにお話を聴き、日本語教育に文学作品をどのように取り入れるかをテーマに語り合った。東欧で日本学に携わる仲間のネットワークが形を取りつつある。

最初に私が授業を行った教室は、イエローサブマリンというニックネームが

いた地下室の古びたランゲージ・ラボラトリーだった。その後、1987年1月14日、中曽根総理がユーゴスラビアを訪問、ベオグラード大学講堂で講演されたのをきっかけに、当時、最新式の立派なランゲージ・ラボラトリーを日本政府から寄贈していただいた。330号教室である。2012年にはJICAの支援で改装され、日本学のシンボルとなっている。2015年月に、本専攻課程は東京外国語大学のJAPAN GLOBAL OFFICEの薄紫のプレートを掲げ、新しい時代を迎えた。伊藤佑郎、沼野恭子、前田泉各氏が訪問、心に残る講演を企画させていただいた。当学科と活発な交流のある岡山大学も、当地に国際同窓会を開設した。

今、この文章を終わろうとするとき、リュブリャナ民族音楽研究所所長であったズマーガ・クーメル博士の言葉を思い出す。引退を前に同僚たちにあてて彼女は手紙を書いた。「研究ということは、個々人がやっているように見えてそうではない。共同作業なのだ。それをあなたたちは忘れないでください」と。ズマーガ先生は、リュブリャナで私が民謡のテキスト研究をしていたころの指導教官。研究ということが何かを教えていただいた。

日文研では、「セルビア・アヴァンギャルドと日本」をテーマに、ツルニャンスキーが編んだ『日本の古歌』（Miloš Crnjanski, *Pesme starog Japana*, Beograd, 1928）を中心として、これまでセルビア語で研究してきたものを日本語でまとめようと思う。今夏、日文研に到着して3日目に、ドイツの高名な日本研究者シャモニ氏にお会いした。ドイツ語に翻訳された日本語の俳句などについて、多くをご教示いただき、フローレンスの日本語の詩歌の翻訳本を図書館で見せていただいた。ちりめん本と呼ばれる珍しい書物である。書棚には、ヴォルフガング・シャモニ氏の数々の著作があった。そしてセルビア語訳の『古事記』も、同僚たちの著作も並んでいる。世界の研究家たちのつながりが、遠い国へ日本を伝え、また日本へ異国の文化の豊かさを届けている。研究者たちは、日本語という樹海のなかに棲む鳥たちの群であるかもしれない。ひとりひとりの仕事は、世界の日本研究という樹海のなかの樹木なのだとわかった。

付記

ベオグラード大学文学部では、20年を記念して研究会が行われたが、その際に論文集が刊行された。ラジッチ氏の生涯について記されているほか、東洋学科の司書スネジャナ・ゲンチッチ女史が作成した業績表も掲載されている。*Večna riznica: sećanje na Dejana Razića / priredili Kayoko Yamasaki i Radoslav Pušić. – Beograd: Filološki fakultet u Beogradu, 2007.*